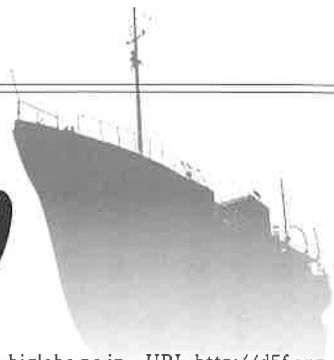


2014.05.01
No.381
(5・6月号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



植樹から14年目を迎え八重紅大島桜の枝振も見事に広がり満開となった



ビキニ事件を学び考える

連続市民講座ひらかれる

四月二〇日午後、港区白金の明治学院大学国際会議場で、ビキニ60年記念の市民講座の第一回が開かれ定席の70人をこえる一〇人が参加し熱気ある講座となりました(同大国際平和研究所と第五福竜丸平和協会の共催)。

この日は、「ビキニ水爆の国内的影響」を中心テーマに、当時直接被ばくに関わった

科学者の話が注目されました。死の灰ととりくんだ分析化学の池田長生さん、海洋調査船俊鶴丸に乗り込み環境放射線の調査を担った岡野眞治さんが、「放射能」「環境汚染」という未知の事態に取り組んだ模様を生々しく語りました(報告の要旨2〜3めん)。

後半は、ビキニ事件当時から今にちまで続く課題を追跡した研究報告。「マグロの汚染」から今日の問題まで敷衍しての報告は水口憲哉さん(資源維持研究所)。半世紀を超える放射能の雨の測定と分析のとりくみから海洋の放射

能が数十年の規模でどのようになっているか、福島原発事故とも重ねて現在の問題点をたどる青山道夫さん(福島大学放射能研究所)の報告。いずれもビキニ水爆事件が今につながり、さらに将来への課題を提起した内容に参加者も興味尽きない様子で、質疑応答も活発でした。

今回の講座は、六月一四日に明治学院大学で開かれます。

一三回目をむかえた「お花見平和のつどい」は、四月五日に開かれました。第五福竜丸のエンジンをもとの島の第五福竜丸の元へとりくまれた市民運動をつないでいこうと植えられた桜・八重紅大島も幹が太くなり枝も広がり「つどい」にあわせて見ごろとなりました。百名を超える参加者は、さまざまな報告に共感し、折鶴と平和メッセージに願いを込めました(詳細は8めん)。

*

一三回目をむかえた「お花見平和のつどい」は、四月五日に開かれました。第五福竜丸のエンジンをもとの島の第五福竜丸の元へとりくまれた市民運動をつないでいこうと植えられた桜・八重紅大島も幹が太くなり枝も広がり「つどい」にあわせて見ごろとなりました。百名を超える参加者は、さまざまな報告に共感し、折鶴と平和メッセージに願いを込めました(詳細は8めん)。

ビキニ事件、放射能と 向き合い分析した科学者

死の灰の解明にあたる
た池田長生さん

最初の証言者は第五福竜丸の死の灰を分析した木村健二郎研究室に所属していた池田さん。同研究室は、戦前から放射能分析を行っていた先進的な伝統を有していました。

「死の灰」分析の意義

第五福竜丸が焼津に帰港したのは三月一四日。翌日に乗組員二名が東大病院で検査。一日に寛弘毅医師から木村研究室に「死の灰」のサンプルが届き、分析を依頼されました。

寛先生からは、入院患者の皮膚に損傷・潰瘍があり、早急に治療法を確立するために、分析を急いでほしいとのことでした。一方で、爆弾を開発した米側からも注目もされ、絶対にまちがえられない。迅速かつ正確に、と相反する条件のなかでの真剣勝負でした。



た。

降灰の組成は、珊瑚礁での実験だったことから、炭酸カルシウムが主成分であることは予め予想されました。放射能の減衰測定により、三月一日時点での放射能は灰1グラムあたり 5.2×10^6 ベクレルと算出されました。そして分析から一週間後には一五種類、三月末には一七種類の放射性同位体を同定し、緊急の治療に活かす分析ができました。

ウラン 237

引き続き、半減期の長いものの測定が行われ、ルテニウム、ロジウムなどの比率が高くブルトニウム239を用いた爆弾だったことが示唆され、さらにウラン237が20%を占めることから、爆弾の構造が中に解明されることとなりました。

ウラン237が生成されるためには、ウラン238に速い中性子をぶつけなくてはならず、このことから当時新型爆弾として話題となっていた3F爆弾であろうと推測されたのです。ウラン237は、一九四〇年代、仁科芳雄博士と木村先生が、理研のサイクロトロンを使って発見した、新しい放射性同位体でした。またルテニウムという対称核分裂も発見していましたが、はからずもビキニの灰から、ご自身で発見した元素と再会したことになります。

当時、米側もウラン237の存在も知っていたかもしれないが、原水爆の開発を目的としているので、日本側に教えるということとは、考えていな

かったのではないでしょう。この分析結果は日本分析学会の『分析化学』第3巻・一九五四で公表しました。

俊鶴丸に乗った科学者 岡野眞治さん

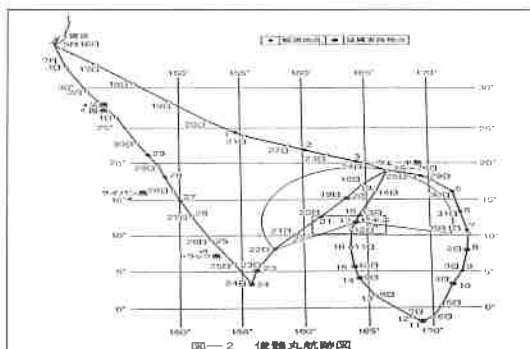
二人目の証言者は海洋調査船俊鶴丸でビキニ海域の放射能汚染を調査に加わった科学研究所(当時)の岡野眞治さん。放射線の研究のための装置開発を担っていました。

被ばく線量の調査

第五福竜丸はビキニ環礁の東方約一六〇キロの地点で実験に遭遇し、ビキニ周辺の小さな島々、そして多くの漁船や魚が放射能により汚染されました。第五福竜丸が帰港した際、乗組員の被ばく線量を知らするために船内のどの場所がどれくらい汚染されているのかを調査しましたが、その結果数百ミリレントゲン、現在の単位で数ベクレルの被ばくを乗組員は受けているということが分かりました。

死の灰の分析

環境放射能の測定には半導



体放射線測定器、スペクトロメーターがよく使われます。スペクトロメーターは環境放射能の測定にとっても効果的で放射線核種の種類など大変様々なことがわかります。我々がガンマ線スペクトロメーターを導入して放射性降下物を分析した結果、様々なことがわかりました。最も重要なのは亜鉛65を発見したということです。また他にもいろいろな放射性物質の比率も非常に正確に観測されています。

ブラボー実験による汚染

特に問題なのは、ロンゲラ (3めん下につづく)

60周年、マーシャル のビキニデーに参加 した大石又七さん

一三日間の「マーシャルの旅」を終えてきた、第五福竜丸乗組員・大石又七さんと娘の田中佳子さんにお話しをうかがいました。

核犠牲者記念日

第五福竜丸が被災した一九五四年から六〇年目の三月一日にマーシャルの首都マジュロで開催された式典に出席した大石さんにとっては一二年ぶりのマーシャルです。今回はかつて出会ったヒバクシャたちと再会し、その後の様子や、いまの思いを共有したいと願っていました。ところがそうした、被ばく第一世代高齢化し、多くがすでに鬼籍の人となっていました。

大石さんは、歴史や社会に深くかわるアメリカに對す

るマーシャルの人びとの「遠慮」があると感じています。だからこそ、自分が声を上げ、意思表示することで、マーシャルの人たちが再び声をあげるきっかけになるのではないかと、この思いも深めました。これは、大石さんたち一行がマーシャル到着直後から国内外のメディアに取材され、注目されたことから、この小さな島々に世界から関心が寄せられたことがわかります。

二人三脚で

前回の旅と大きく違うのは、娘の佳子さんが同行したことです。一昨年、脳出血で倒れ現在もリハビリをしながら



集会前日、町のマーケットで材料を買いプラカードを手作り。前列左から二人目大石さん 後列左から二人目田中さん

らの生活です。当初佳子さんは大石さんのマーシャル行には猛反対でした。出発直前まで主治医や保険会社と交渉し連日続いたメディア取材やご自身の仕事の調整もしながら旅の準備をすすめました。

出会ったマーシャルの人たちから「自分たちは世界から孤立し、見捨てられているように感じる」「自分たちには隠されていることが、あまりにも多く感じている」という声を聞き、大石さんが証言し続ける意味を、これまで以上に考えています。

土地に根ざす文化

二九年にわたりで避難生活を続けるロンゲラップの人にとって、いま住むところは「他人の島」であり何もかもは借り物です。マーシャルの人々にとって、土地とは祖先が眠り、そこからの恵みをいただき、子孫につなげていくよりどころです。祖先の土地を離れなくてはならない、「帰りたい、でも帰れない」という苦しさと、文化・伝統・価値観の基盤となる土地を奪われた悲しみを、深く理解できたと話します。

(編集部)

(2めんのつづき)

ツプ島の南部は汚染が少ないのに対し、北部はかなり汚染されているということ。島民は皆一度クワジエリンへ避難しますが、その後米軍はロンゲラップ島の南部に帰島するように指示を出します。しかし当然島に戻れば生活のため北部の汚染された地域にも行くので、島民はさらなる被ばくをしているのです。

俊鶴丸による調査

俊鶴丸はウェーキ島を經由して東側を一周りし、赤道を超えビキニの近くを通り、放射能の影響を調べました。船



左から池田さん、岡野さん

内では常にシンチレーションカウンターで放射能を測定しました。そうすることでどこがどの程度汚染されているのかが分かり、ビキニの海がどれほど汚染されたかということがかなり分かりました。

福島と比較をして

実際にキャッスルシリーズで放出されたセシウムは91.8ペタベクレル。チェルノブイリの時に降ったセシウムは86ペタベクレルでした。つまりキャッスルシリーズと同じくらいのセシウムがチェルノブイリの事故で放出されています。では福島島の事故ではどれくらいかという約3.6ペタベクレルです。如何にビキニの実験により放射能が大量にばらまかれたということがわかります。

当時を振り返って

俊鶴丸での仕事は環境放射能測定の基本をきちんとやっていたという点で大変意義深いものでした。それに関わった私は非常に幸運で多くの知識を得られたと思っています。

第五福竜丸

被ばくの航海が初の講演に

「パンパーン」大音響の張

扇（はりせん／講談師が釈台を打つ扇子）が展示館内に鋭く反響し、ビククリ！「響きますねえ」と船を見上げる講談師の田辺一乃（たなべかずの）さん。第五福竜丸を題材にした講演を作り、四月二日夜、両国亭（墨田区）で高

座に掛けるのに先立ち展示館のボランテアガイドやスタッフを前に演じました。

筋立ては、敗戦直後に生まれた第五福竜丸（わたくし）が語るその生涯。時代はGHQ支配化での規制で一〇〇トン未満の漁船しか作れなかつ

たなかで一〇〇トンを超えて

大きく造られ、漁船なので「サバをよんだ」とシヤレて、しかしマツカーサーラインのこ

とや原爆被害が報道規制でサンフランシスコ条約発効まで知らされなかったという事実

などを織り込んで被ばくの航海へとすすみます。

三月一日未明の場面、「空がサーッと夕焼け色に染まり、轟音が船を襲い、入道雲が五つ六つ重なるように天をつらぬいて、はえ縄作業を始めてやがて、ばらばら空から白いものが降ってきた」。久保山無線長の「原爆実験」



展示館で新作講演「第五福竜丸」を披露する田辺一乃さん。学習会などでの講演依頼は田辺さんにご連絡を。メールアドレス kikuwako@yahoo.co.jp

への警戒、「ボカチンを喰らうといけないから」と無線で異常を知らせなかったことや急性放射能症状があらわれる乗組員の様子、たんたんとした語り口に船が見舞われた災禍がリアルに伝わります。

焼津に戻つての病院での検査から灰を持つて東大病院へ、新聞報道により被ばくが知られて、「大学の先生たちがわたくしをガイガーカウンター測定」、漁師たちはまちから離れた病院に隔離され、「焼津港につながれた船（わたくし）へ見る人の目はだんだん冷たくなっていった」との語りには、思わず船に寄り添う気持ちに駆られました。

* 田辺さんの師匠は田辺一鶴さん。立派な髭をたくわえて派手な身振りでテレビなどでも活躍し、講演を聞いたことがない世代にその存在を知らせた講談師です。

田辺さんと一鶴師匠の出会い、公務員として人事院で広報誌の編集を担当中に一鶴師匠に原稿依頼をするためにその講演教室に顔を出したことがきっかけとか。生徒とし

て通ううちに、弟子になれと師匠から勧誘されて、承諾する前に「一乃（かずの）」という名前までいただいて、「いつか講談師の（数の一人）に入れるようにとの意味合いだそうですが」、二〇年勤めた公務員を辞めて講談師へ転進、四年前に二つ目に進みました。「源平盛衰記」や「赤穂義士伝」など、師匠の得意だった歴史・古典作品も演じる一方で、「セクハラ講演」

や「奥尻島津波」「明治荒川大水害と伊藤左千夫」など創作ものも作り高座に掛けたり、各地の催しで演じているとのこと。

* 「第五福竜丸」は、高校時代（神奈川県生田高校）の恩師から、憲法九条を守る取り組みの春の学習会でぜひ演じてほしい、被ばく六〇年に向けて作れないかと依頼されて始まりました。昨年九月には展示館を訪れ時間をかけて見学、学芸員の話聞き大石さんの著作を読み込んで事実をキチンと伝える、という筋書きが出来上がりました。

* 夢の島に放置され「粗大ゴ

ミ」の第五福竜丸を、市民の投書で「沈めてよいか」と保存の声が広がり、やがて展示館が作られ永久に保存されたとの顛末に、「小さなボロ船のわたくしは、とんだことで日本一有名な船になりました」とその航跡を振り返りながら、「忘れてはいけないこと」と、「むしろ現代のことを考え学ぶきっかけになれば」と語る田辺さん。演ずる時間は三〇分ほどですから何もかも語るといふわけにはいきませ

ん。むしろ「さて、このあとはどうなるのでしょうか」との余韻が聞き手に「どうなったんだろう」と感じてほしい。「六回の水爆実験、その一回目ブラボーは大事事件に、ではあとの五回は：当然中止されて。いや予定通りやりました」。放射能の雨、野菜はよく洗って出荷、では洗う水はどうしたの。伝えたさまざまな事柄からさらに興味をひろげてもらえれば、若い人たちにぜひ聞いてほしい、そのときは五分でもよいから「古典」も語りたいと講談師の矜持をおもわせる言葉でした。

（編集部）

第五福竜丸は航海中



表紙絵は黒田征太郎さん

「ビキニ被災」から六〇年経つのだそうである。子どもだった私にも、あれは怖かったなあと記憶がある。今回「第五福竜丸は航海中」と題する本に出会った。初めて知ることも多く、忘れてはいけぬ歴史がよみがえった思いがした。

本のサブタイトルに「ビキニ水爆被災事件と被ばく漁船60年の記録」とある。ページをめくると、一六、一七ページの

ジの見開きに、船の乗組員二三人の顔写真がずらり並ぶ。みんな坊主頭、ほとんど二〇代、同じ柄の寝巻を着ているように見えるのは、病院で撮ったものか。

私は、かつて鹿児島島の記念館でみた特攻隊兵士の写真のように思えてドキッとした。あれもみんな若かった。母親への別れの手紙を遺して、米艦船に体当たりしてみんな死んだ。

一九五四年三月一日、西太平洋で、アメリカの水爆実験の放射能「死の灰」を浴びた福竜丸の二三人はすでに一人人が亡くなっている。被ばくしたその年九月、無線長の久保山愛吉さん、当時四〇歳が放射線による肝臓障害で亡くなったニュースはよく覚えている。他の乗組員の死因は肝臓ガン八人、大腸ガン二人、肝機能障害や肝硬変四人などが目に付く。放射線の影響だったろう。「福竜丸の語り部」としていまも頑張っておられる大石又七さんの若き写真には「冷凍士、当時二〇歳」とある。

この本をいま、なぜ作ったのか。

あのとき、日本の科学者は学際的に手を携えて事件に立ち向かった。核廃絶への国民的運動が広がった。しかるに今回の福島原発事故では政府の後追い対応ばかり、ビキニの経験が生かされていない。福竜丸はいまなお「核なき世界」へ航海を続けている。本の冒頭、そんな刊行の言葉が綴られている。

本の中身を紹介しよう。

「わあー、なんだ、あれは」。西の空が焼けただけたように真っ赤になった。それから、七、八分後、轟音と衝撃波。そして黒雲から雨が落ち、白い粉が降ってきた。めまい、吐き気、歯茎の出血、やけど。不安のなか母港焼津に帰港した。三月一六日の読売新聞朝刊に「邦人漁夫、ビキニ原爆実験に遭遇」という大スタープが載る。それから「原子マダロ」の廃棄、調査船「俊鶴丸」の派遣、海洋汚染の確認、久保山さんの闘病と死に至るまで、日本社会を震撼させる。

私が驚いたのは、加害者側のアメリカの反応である。米議会や米政府から「日本はお

おげさだ」「福竜丸は警告を無視した」「日本人漁夫が水爆実験をスパイしていたとも考えられる」などの声が上がった。乗組員の思想調査にまでおよんだ。

日米間の外交交渉は、アメリカが二〇〇万ドル（七億二千万円）を日本政府に支払うことで決着した。それは損害賠償ではなく、あくまで人道的善意ということだった。福竜丸乗組員には平均二〇〇万円の見舞い金が渡され、各地のカツオマグロ漁業者にも配分された。

この本で日米の駆け引きの詳細を知って、改めて冷戦時代の非人道性を感じた。大国が核で脅しあい、太平洋の島々で自然豊かな生活をしてきた住民を追い出し移住させ、原水爆の殺人能力に磨きをかけての実験にいそしむ。第五福竜丸の記憶は、そんな時代を繰り返させないという誓いでもある。

それにしても、第五福竜丸が「廃船解体」処分を受けることになって東京のごみ捨て場「夢の島」に浮かんでいたときに、これを保存しようとする

運動が澎湃として起こって、どんなに救いだったことか。

一九六八年三月一〇日の朝日新聞の「声」欄に載った武藤宏一さんの投書はいま読み返しても胸をうつ。

「日本人にとって忘れることのできない船。けっして忘れてはいけないあかし：原爆ドームを守った私たちの力でこの船を守ろう」

この本には、いま展示館に安置されている第五福竜丸の本体、大漁旗や乗組員の服や身の回り品、放射能検査の器具、死の灰「純品」のビンなどの収蔵品の写真もある。ペン・シャーンや黒田征太郎らの絵や子どもたちの描いたポスター、各種資料も載っている。「福竜丸百科」ともいってき決定版である。

「第五福竜丸は航海中」とはいいい題だな。この本をいつも手の届くところに置いて、ときどき展示館に船を見にいこう。いつか来るべき「核なき世界」を夢見て。

（はやの とおる／桜美林大学教授、元朝日新聞編集委員）



五月の晴れた日には、第五福竜丸展示館の空を「太郎の鯉のぼり」が泳ぎます。

第五福竜丸展示館で岡本太郎「明日の神話」原画展が行われたのは二〇〇四年の四月でした。出品依頼に東京・青山の岡本太郎記念館を安田事務局長と一緒に岡本敏子館長を訪ねたのは、前年の四月、記念館入口に「太郎の鯉のぼり」が泳ぎます。

連載②

晴れた日に 雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

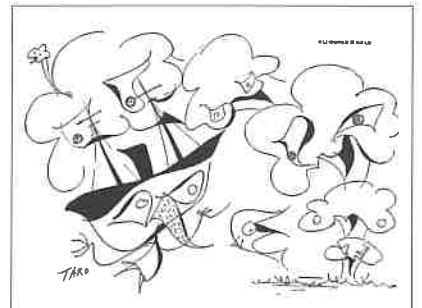
り」が揚がっていました。

この日の敏子さんの話は、岡本太郎の代表作「燃える人」の制作のいきさつから、持参した一九五九年日本原水協作成のパンフレットに太郎さんが提供した挿絵「新しい怪物の世紀」に描かれた福竜丸の話へとつづきました。

油彩の大作「燃える人」には、画面左下に小さな船が描き込まれています。パンフ挿絵を見て敏子さんは「この絵は『燃える人』の下絵のようね」と言われ、太郎さんにとつては「この船（福竜丸）のことがとても印象的だったのね」と話されました。

「太郎さんは、人として燃える、人間として怒りを感じそれをつきつけた。この絵のキノコ雲にしても舌を出したり、ユーモラスで面白い。それはきわめて、まがまがいなものなんだけれど、それを被害者意識だけで直接的には描かない。一つ越えて表現する。それが岡本太郎なのよ」

また、敏子さんは「燃える人」制作のいきさつを、日本国際美術展（一九五五年）の出品依頼を受けたとき、この



新しい怪物の世紀

展覧会にピカソが「ゲルニカ並」の作品を出すという話が伝わって、それならと描いたのが「燃える人」だったと語り、「いかなれば太郎のゲルニカですよ」と言われたのでした。

*

二〇〇五年初から、中国新聞は特集企画「明日の神話—岡本太郎のヒロシマ」を連載しました（道面雅量記者）。その第一部「壁画の誕生5」は、敏子さんが言われた「太郎のゲルニカ」の話を、次のように結んでいます。

「六七年、メキシコの実業家の依頼を受けて『明日の神話』の制作が始まる。この時、岡本の念頭に「燃える人」から引き続いて『ゲルニカ』への意識があったかどうかは分

からない。しかし『明日の神話』が「岡本のゲルニカ」と呼ぶにふさわしい作品であるとはいえるだろう」（中国新聞二〇〇五年・一月八日）

*

「明日の神話」は、一九六七年から約二年をかけメキシコで制作されました。展示予定が崩れ壁画は行方不明になります。発見されたのは二〇〇三年の九月、日本への移送と修復、公開・展示場所の選定のプロジェクトが起ち上がります。

二〇〇四年四月三日、第五福竜丸展示館の「明日の神話」原画展オープニングでの敏子さんの話。「原爆の炸裂はすごいけれども、太郎の骨はばらばらになりながらも、美しく燃え上がっている。原爆は凶悪だけれど、人間はもっと大きな力で原爆に立ち向かうんだよ。その瞬間に『明日の神話』が生まれるのよ」

日本移送を間近に、「太郎を語る」敏子さんの笑顔が印象的でした。しかし、敏子さんはその一年後、中国新聞特集に「この絵のメッセージをヒロシマから世界に発信でき

たら素晴らしい」との言葉を残したままに、四月二〇日急逝されたのです。79歳でした。

*

巨大壁画「明日の神話」（縦5.5メートル幅30メートル）は、二〇〇八年一月展示場所選ばれた東京・JR渋谷駅と京王井の頭線渋谷駅の連絡通路で公開展示されました。連絡通路はほぼビルの三階、壁画正面の窓からは駅前のスクランブル交差点を見渡せる場所に置かれています。かつて太郎さんも立ち寄られたであろう道玄坂「恋文横丁」ガード沿いの「のんびい横丁」「とん平」、それらの記憶を望見できる位置でもあります。

「燃える人」のテーマを拡大し、原水爆と人間を描いた壁画「明日の神話」は、日々三〇万人以上の市民が往来する都心の街で、ヒロシマ・ナガサキ、福竜丸を語り、人それぞれに核時代の「明日の神話」を問いかけています。

*

「燃える人」の画面左下に描かれていた船（福竜丸）は「明日の神話」では画面右下（7めん下につづく）

マーシャル行2014 想い新たなヒバク60年

島田興生

その2

ふるさとに戻るのか：

一月二一日午前、船はマーシャル諸島の首都マジュロに到着。久しぶりの大型客船の入港に、マジュロの多勢のボランティアや在留邦人が案内所や売店を出して迎えてくれた。荷物を定宿の安ホテルに入れると、早速馴染みの人たちを訪ねることにした。今回の滞在は一〇日間と短く、あまりのんびり出来ない。



マジュロ病院のリミヨさんとタリネスさん

年であるという事、ロンゲラップ島の被ばく者の高齢化が進み、亡くなった方も多いので、今のうちに少しでも話を聞きたい。一九五四年に被ばくした八六人のうち二〇人が存命し、うち一三人がマジュロに暮している。とくに私が四〇年前に初めてロンゲラップ島でお会いした四人の女性被ばく者の話を聞きたいと思った。

聞きたい一つ目は、被ばくした六〇年前の事、第二は、それから六〇年たった現在の事、三つ目は、ふるさとロンゲラップに帰るかどうかです。揺れる思いに苦悩にじむ
リミヨさん(73歳)は、元小学校の先生です。二〇〇二年にロンゲラップ島民が疎開中のメジャト島からマジュロに引越してきました。リミヨさんは二年前のインタビューでは、「私は被ばくしているので、帰ってもいい」と言

っていましたが、今回は「私は帰らない」と考えが変わっていました。島民の間では、帰島への考えがコロコロと変わることは珍しくありません。残留放射能が多いとか少ないとかの話、住宅や学校などインフラ工事の進捗状況、それらを聞いたりするうちに気持ち揺れてしまうのでしょうか。

また、リミヨさんが帰るとなると、娘や孫も一緒に帰るといふことになります。娘や孫がおばあちゃんの世話をするのがマーシャルの習慣だからです。一緒に帰れば子や孫が被ばくするかも知れないという不安が常に頭にあつて帰島を決断出来ない状況が続いているのです。

被ばくから六〇年たった現在の様子を聞きました。リミヨさんは「昔は亡くなる人は少なかったけど、最近では亡くなる人が多い。六本指などで体に障害のある子や火の上を平気で歩いたりする知的障害を持った子どもも多い。マーシャルの一部の人は私たちを「リーボム(爆弾の人)被ばく者」と呼んで私たち

に接触したくないと思ってる」と教えてくれた。

また、リミヨさんは第五福竜丸平和協会主催の三・一ビキニの参加者に向けたメッセージを私に託しました。

日本人々と結んで

「まずは、あなたたちのマーシャルへの色々な支援にお礼をいいたいです。また、東日本大震災で福島の人々の周りで起きた大変な事故について私と私の家族から辛い悲しい気持ちを伝えします。

六〇年たった今も、ロンゲラップ島は完全に除染されていません。いつ島に帰れるのか、どのようにしたらローカルフード(ヤシの実や魚)が食べられるのか、私たちには分かりません。

放射能がなくなるのにかかる時間がかることを私たちは知っています。五〇〇年もの間留まり続ける放射能があることも知っています。病氣は遺伝子によって子や孫に引き継がれていくのです。

本当はすぐ帰りたいけど、島にポイズン(放射能)が残っている限り帰りたくないのです(二〇一四年一月

で大きなマグロを引っ張っていわば「操業中」です。

*

「新しい怪物の世紀」の原稿をいただきに青山のアトリエ(今の岡本太郎記念館)に伺ったのは五九年の四月半ば都電で行ったのを覚えてます。

一九五九年の第五回原水爆禁止世界大会は四年ぶりに広島で開かれました。岡本太郎さんとは、大会記念企画美術展「日本人の記録」で再び一緒にすることになります。

(やまむら しげお/第五福竜丸平和協会顧問)

二五日、リミヨ・エボン)。

今も、毎日八種類の薬を飲み、夫のタリネスさん(71歳)も甲状腺腫瘍と糖尿病に苦しんでいる。最後に二人はその想いを込め「177(ワンセブンセブン)ビキニやロンゲラップなど四島の被ばく者のこと」という歌を歌い、メッセージと一緒に託してくれたのでした(おわり)。(しまだ こうせい/フォトジャーナリスト、第五福竜丸平和協会専門委員)

平和のねがい桜に込めて

13回目となる「お花見平和のつどい」は、4月5日に開かれ120人が参加しました。「第五福竜丸のエンジンを東京夢の島へ都民運動」によりエンジンが展示館まえのひろばに展示されて14年、運動の中心を担った東京地婦連により植樹された八重紅大島桜の横には「21世紀を平和の世紀に」との標柱が立ちます。桜の咲く頃に第五福竜丸にあつまりエンジンを見て船に会い平和・核廃絶への誓いを新たにと始められたつどいです。

今回は第五福竜丸被災60年、特別報告として第五福竜丸平和協会・安田和也事務局長が、戦後の核開発―水爆の時代への突入と日本の遠洋マグロ漁船が赤道海域に進出していった時代をたどり、核実験がもたらせた惨禍とその非人道性を強調しました。

「へいわこそ暮らしの第一歩」と長年平和の運動をすすめる生協のとりくみのなかから東京都生協連のコープみらい、東京南部生協、東都生協、パルシステム東京が工夫を凝らした多彩な活動の様子を披露しました。

恒例となったピース・ミュージックは、佐々木祐滋さんのギターとうた。「折鶴の子」佐々木貞子さんの甥として、貞子の願いを伝える音楽活動をつづけています。その歌と語りに共感がひろがりました。

連絡会参加の各団体からの報告をうけ、参加者が記した平和メッセージカードが読み上げられ、寄せられた折鶴の紹介があり閉幕しました。この日、ボランティアによるガイドが午前午後2回行われました。

デジタルアーカイブ試行

広島・長崎の原爆被害、沖縄戦、海面上昇に苦しむツバル、震災と津波被害のバンダ・アチェと東日本大震災などの「体験・記憶・証言」を、重層的に情報を重ねて構築するデジタルアーカイブの試みについて、3月28日首都大学東京の渡邊英徳さんからレクチャーを受けました。ビキニふくしまプロジェクトのよびかけで、マーシャル・第五福竜丸・焼津・太平洋核実験被害の記録を統合して「記憶のコミュニティ」を構築できないかと模索していく

予定です。

このデジタルアーカイブはGoogle Earth（衛星写真を使って世界を俯瞰できるサービス）を利用するもので、世界中からアクセスが可能です。渡邊さんは、4月10日軍縮・不拡散イニシアティブ（NPDI）外国人記者団の取材を受け、マーシャルと第五福竜丸に関するデモンストレーションも行いました。

マーシャル諸島共和国が核保有国を提訴

マーシャル諸島共和国が4月24日、核兵器を保有するとみられる9か国を相手取り、一年以内に核軍縮交渉を開始することを命じるよう求めて国際司法裁判所（オランダ・ハーグ）に提訴しました。

被告はNPTに加盟する米露英仏中と、NPT未加盟のインド・パキスタン・イスラエル・北朝鮮の9か国です。この訴訟は米反核団体「核時代平和財団」や反核法律家協会もサポートし、国際的にも注目されます。

連続市民講座

ビキニ水爆被災事件・第五福竜丸被ばく60年

いま水爆の時代を問う ～核と向き合い明日へ

第2回 6月14日（土）午後1時30分より
明治学院大学白金校舎2号館2401教室
（1回目と会場が変わりますのでご注意ください）

ビキニ事件 日米関係への影響

- 報告
- 1) 公開外交文書に見るビキニ事件の日米交渉
市田真理（第五福竜丸展示館学芸員）
 - 2) ビキニ事件の米政策への影響と日米関係
太田昌克（共同通信編集委員）
 - 3) ビキニ事件の経緯と経済界の動向
山本義彦（静岡大学名誉教授）
- コーディネーター 高原孝生（明治学院大学）

◎ご予約は第五福竜丸平和協会に電話・FAX・emailで

企画展

第五福竜丸被ばく60年特別展

水爆の時代をたどる ―所蔵資料から見える 第五福竜丸の被ばく

5月3日～9月15日

第五福竜丸平和協会が所蔵する資料のうち、常設では展示していない資料を公開し、当時の漁業及び船での生活、乗組員の日常などを伝えます。死の灰試料、乗組員の衣類・日用品、乗組員に寄せられた手紙などの現物資料と解説パネルで構成します。また、核実験被ばくという共通の体験を持つマーシャルの人びとと日本人との交流を描いた展示も行います。